



# 歌の文箱



うえだみつお

## 粋な都々逸

都々逸（どどいつ）とは、江戸末期、都々逸坊扇歌によって大成された定型詩で七・七・七・五の音数律に従ったもの。主として男女の仲の機微を題材としており、色っぽいものが多い。

ところが昨今の都々逸は野暮な内容が多くなったように感じられる。都々逸に関する書籍をみても、心を動かされるような文句が載っていない。そこで私がこれまでに集めた「とっておきの都々逸」を紹介する。本当は教えたくないのだけれども、歳のせいか伝承しなければ絶えてしまうとの想いが強くなったのである。

膝枕（ひざまくら）貸してうれしく しびれた足をじっとこらえてのぞく顔

いいねえ、粋だねえ、ラジオから聞こえる柳や三亀松師匠の名調子にしびれていた小生は中学生であった。

師匠の「いやあーん、うっふーん、ばっかあー」は絶品であった。

外は雨 酔いも回ってもうこれからは あなたの度胸を待つばかり

謡曲「松風」の松風、村雨の姉妹、溝口健二の映画「雨月物語」の田舎に残してきた女房等々、古来日本女性の美は恋しき人の訪れを待つ風情の中にありました。

「少しくらいの音は雨が消してくれるのに、ええ、じれったいねえ、このひと」と女がつぶやく。

お名は申さぬ一座のうちに 命あげたい方がいる

都々逸の醍醐味は「あっ」と驚くどんでん返しが待っていることだ。この歌の場合、「命」までを『刺客が「お命頂戴」とでも言うのかいな』と思わせるようなドスの利いた声でうたい、「あげたい方がいる」を一転、ぐっとなまめかしく初々しく締めくくらねばならない。

親がすすめる私も惚れる 粋（いき）で律義（りちぎ）なひとはない

作家阿川弘之氏令嬢阿川佐和子さんは三十数回お見合いをしたが、ついに理想の伴侶にめぐり合えなかった。その経緯を「お見合い放浪記」に記されている。拝読したが「そりゃあ無理だ」と思ったものだ。見合いで大恋愛できる相手を見つけようというのである。粋な男は見合いなんぞしなくても女には不自由しないし、親が安心して薦める堅実な男は恋愛の対象とはなりにくい野暮天ばかりである。「粋で律儀な男なんざあ、いるわけないわさ」とこの歌をおしえてやりたいね、まったく。

おまはんの心一つでこの剃刀（かみそり）が 喉（のど）へいくやら眉（まゆ）へやら

諦（あきら）め切れない女の最後の手段はかみそり。

「畜生、死んでやるう、」

「おまえ待ちなよ 短気おこすんじゃあないよ、分かったよ 女房にすりゃあいいんだろ 女

房に」

てな具合に晴れて眉を落としたご新造（若奥様）さんの誕生とあいなる。

きれてみやがれただ置くものか 藁（わら）の人形に五寸釘

冷たくなった男への捨てぜりふ。荒々しい息使いの裏から狂おしい胸のうちが切々と伝わってくる。しかし私の知人の「恨み言はそれだけか」の名文句にあった日にゃあ、五寸釘も蠅螂の斧（かまきりのおの）と化してしまうのです。

でもね、近頃の娘ときたひにゃあ、藁人形の意味さえ知りやしねえ。困ったもんですが。しょうがねえ、うちの娘にも正しい作法を教えてやりましたよ、

『まずは白装束に身を包み、頭に五徳（ごたく：火鉢に据えてヤカンをのせる三本足のついた鉄の輪）を戴いて、馬手（めて・右手）には木槌、弓手（ゆんで・左手）に人形、櫛をしっかりとくわえもち、草木も眠る丑三つ時（午前二時すぎ）、所は京都貴船神社、三本ろうそく頼りにて、につくき敵（かたき）の心の臓へ「死ねや、死ねや」と声はげまして打つは鐵（くろがね）五寸釘、打たれし敵は七転八倒、苦悶のうちに息絶えようぞ、ゆめゆめ疑うことなかれ』とね。

間口三寸奥行きや四寸 家、蔵、地面を捨てる穴

わかっちゃいるけどやめられない、道楽息子なりの心意気と解したい。

小生が妻帯後、ものした句も御披露する。

「これがまあ ついのすみかか ゆき五寸」

いっそ聞こうか いや聞くまいか たたむ羽織に紅のあと

江戸時代には満員電車もなければ混み合ったエレベーターもない。口紅がそう簡単につく訳が無いのです。 どう申し開きをするのか、聞いてみたいもの。

何処で借りたと心も蛇の目 傘の出どこをきいてみる

柴田錬三郎氏の眠狂四郎シリーズの中で

「草のよう 傘の出どこを 根堀り葉堀り 鎌をかけては 聞いてみる」

というのがあった。男は蛇のように、ぬらりくらりと生返事をするしかない。

（注）「蛇の目」とは「じゃのめ傘」のことでの和傘の丸い模様が蛇の目のように見えたことから。

一人でさしたる唐傘（からかさ）なれば 肩袖（かたそで）濡れようはずがない

女房の観察眼は時として銭形平次や人形佐七の親分にも劣らないことを証明する唄。あなどっちゃあいけませんぜ。

酒も博打（ばくち）も女も知らず 百まで生きてる馬鹿なやつ

百歳近くでなくなった森繁久弥氏は「酒、歌、女、我にあり」の極楽トンボ人生。

せめて地獄へでも行ってくれなきゃあ、あまりにも不公平というもんじゃあ、ござんせんか、皆の衆。

ぼうふらは 人を刺すよな蚊になるまでは 泥水飲みのみ浮き沈み

森繁久弥氏が勝新太郎に教え、勝が好んで歌ったという。浮き沈みの激しかった勝新の心に強く響いたのだろう。

勝新太郎は「花の白虎隊」で市川雷蔵とともに華やかにデビューしたが二枚目としては中途半端で、鳴かず飛ばずの時代が長かった。それが「座頭市」という当たり役に出会い一躍人気者に浮き上がったが映画産業の不況、大映の倒産と、また不遇に沈んだ。死んだ時、奥さんの中村玉緒があの世界でも不自由しないようにと棺桶に三百万円入れたそう。豪気だねえ、泣かせるねえ。

主は二十一わしゃ十九 始終仲良く暮らしたい

始終と四十を掛けている。初々しい若夫婦、うらやましい。

よく似た、人生の理想を歌った歌詞は以下のとおり

「いつも三月春の頃 お前十八わしゃ二十 使って減らぬ金百両 息子三人皆孝行  
死んでも命がありますように」

会うた夢みてわろうて覚めて あたり見回し涙ぐむ

せつないねえ 笑わなければ覚めなかったろうに、覚めなければ忘れてたかもしれないのにねえ

白鷺は 小首（こくび）傾（かし）げて二の足踏んで やつれ姿を水鏡

高知のよさこい節では「白鷺は小首傾げて二の足踏んで一足、一足深くなるよ そ一だ、そ一だ、まったくだよ」となる。どちらも、恋の重荷を感じさせる名文句である。この歌を知って白鷺を見ると、「恋わずらいをしているのか」とふと思うことがある。

夢で見るよじゃ惚れよが足りぬ 真に惚れたら眠られぬ

謡曲「松風」のなかに、「あとより恋いの攻め来れば」と言う一節があって長い間意味がわからなかったが、

「枕より 脚（あと）より恋の攻め来れば せんかたなみぞ床中におる」

の一部とわかりようやく納得できた。「頭上からも足先からも恋の思いが攻め来るので。やむを得ず寝床の真ん中に座って眠らないでいる。苦しいことだ。」という意味。げに、恋は曲者。

丁とはりんせもし半ならば わしを売りんせ吉原へ

この歌の作者は男に決まっている。こんなにきつぷのいい女が居る訳ない。あまりにも勝手すぎるのでありえないとは思いますが、もしいたら教えておくんない。

惚れた数から振られた数を 引けば女房が残るだけ

身につまされるねえ。大事にしなきゃあと、あらためて思われるのでごぜえます。

亭主死んだら教えておくれ 今でも惚れてるこの俺に

ソウラン節に

「わたし恥ずかしおじちゃんにほれた 早くおばちゃんが死ねばよいチョイ」  
というのがある。奥方連が聞いたら角か牙がでそうな歌である。

会いたく無いわさ ただあのひとの住んでるおうちを見たいだけ

小浜に出張した折り、聞いた話からつくったもの。男は京都の壬生に住んでいるそうな。  
若狭女の深くてつつましい心根を哀れと思え京男 コラ！

夕立恋しやあの南禅寺 山門隠れのあついキス

小生が学生の頃、ものした歌。事実に基づくものか、はたまた希望的創作か、ご想像にお任せ  
する

人に言えない仏があって 秋の彼岸の回り道

私の好きな歌で、森繁久弥氏もこの句が好きと見えて著作のあちらこちらに出てくる。  
「粹」「侘び」「無常感」など、日本文化の真髓をひとまとめにしている。都都逸の最高傑作に  
認定する。

## チクリと刺す狂歌

---

狂歌とは五・七・五・七・七の音で構成し、社会を風刺したり皮肉ったりした短歌のこと。人生の機微に触れた文言が多く、落語の枕でもよく紹介される。私も中学生時にラジオで聞いた落語で覚え始めたものだ。

世の中は 左様（さよう）で御座るごもつとも なにと御座るか然（しか）と存ぜず

出世もしくは処世に役立つ呪文。サラリーマンは勿論、家庭の主婦でも、判断に困ったときこの呪文を唱えれば大抵の場合、無事に過ごすことができる。井上靖氏の随筆の中にも「ごもつとも」と「御覧のとおり」の二語のみで総てを済ませていた重役が実在している話があった。

世の中は 金と女が敵（かたき）なり 早く敵にめぐり会いたい

近頃の男性は「おたく」とか「引きこもり」とか女々しくてこれでは一生敵にめぐり合うことはあるまいと思われるのが多く、誠に嘆かわしい。「それにつけても金の欲しさよ」。

世の中は月にむら雲 花に風思うに別れ思わぬに添う

ようやくめぐり合っても好いた同士が別れ、好きでもないのに一生添い遂げてしまう。思うように行かないのが人生というもの。お釈迦様も四苦の中に「愛別離苦、怨憎会苦」を挙げておられます。

世の中に 寝るほど楽はなかりけり 憂世の馬鹿は起きて働く

誠にならぬ憂世の馬鹿は、あくせくと働いております。

落語の世界でも寝て暮らすことが極楽とみえましてな、

ご隠居「おい、熊五郎。いい若いもんがゴロゴロと寝てばかりいちゃあ、いけねえよ。ちったあ働いたらどうだい。いいことあるよ、」

熊五郎「働いたらどんないいことがあるんですかい？」

ご隠居「そりゃ、おめえ、ゆっくり寝て暮らせるよ」

熊五郎「なあんだ、今とかわらねえや。寝てよおっと。」

お後がよろしいようで。

楽しみは 弓手（ゆんで）に女、馬手（めて）に酒 背中に柱 ふところに金

首尾よく、敵にめぐり合えた幸せな男の姿。これにひきかえ

「馬手（みぎて）に血刀 弓手（ひだりて）に手綱（たづな）馬上（ばじょう）豊かな美少年」

（民謡・田原坂）

なんざ、気の毒を絵にかいたようなもの。

春娘 夏は芸者で秋は後家 冬は女郎で暮れは女房

季節によって輝きが違う女性を称えた狂歌か？

「春は娘が生き生きと輝いて見え、夏は浴衣姿の芸者衆の粋なこと、秋は後家さんの黒紋付が男心をそそり、冬は女郎の暖かい肌が恋しく、暮れは借金取りを追い払う頼もしい女房」の意味だろうか。

世の中は なんのへちまと思えども ぶらりとしては暮らされもせず

この歌は、「世間を見下していても働かねば生きては行けないものだ」という意味である。

私も会社を退職した直後は、「俺は自由だ！」と叫んだものだ。この歌のように「ぶらりとして」暮そうと思ったのである。しかし、家で何もしないで遊んでいるのも苦しいということが、一年もしないうちにわかってきた。全く、貧乏的な性格である。

いつまでもあると思うな親と金 無いと思うな運と災難

姓名判断にこり、他人の運勢を見て回った時があった。その時、わかったことだが悪い事はよくあたり良いことは殆どあたらない。多分、どの人にも悪い事のほうが良い事よりもより多かった、或いは忘れられないからであろう。逆にいえば占いとは「あなたはお金に縁がないでしょう」とか「最近、失恋したでしょう」とか悪い事を言っておけば良く当たるという評判を得ることが出来る。占いなんざ、夢夢信じることなかれ。

寝て待てど暮らせどさらに何ごとも無きこそ人の果報なりけれ

「果報は寝て待て」というのは誤りで、良い事も悪い事も何もない平々凡々たる人生が一番の幸せと言うこと。災難に会った時に初めてこの言葉の意味がわかるのだろう。「無事これ名馬」も同義。似た言葉に「父死ぬ、子死ぬ、孫死ぬ」がある。年寄りから順番に死んで行くことが人の世の幸せということ。

さる良家の女性が、これまでの人生が幸せ過ぎて生きているという実感が湧かないと、贅沢な悩みを訴えていた。「ほどほどの不幸」というものが売り出せたなら、苦勞を知りたい金持ちが争って買いにくるかもしれない。

## 覗きからくり節

「覗（のぞ）きからくり」とは江戸時代中期に江戸と大阪に始まった見世物の一つ。おおきな箱の前面に複数の覗き穴があり、料金を払って中の絵を見る。箱の横には説明者が立ち、紐を引くことにより次々と絵を変えていく。その時に細い棒で箱を叩きながら歌うのが「覗きからくり節」で、出し物で大評判をとったものが「八百屋お七」だった。

「八百屋お七」の説明もいりますねえ。お七は一六八二年、江戸の大火の際、駒込園乗寺に避難したが、そこで寺小姓生田庄之助と恋仲になった。家に戻ってから忘れられず、再会を願って放火未遂事件を起こし、捕らえられて鈴ヶ森で火あぶりの刑に処せられた。十五歳で火あぶりになったのは江戸時代でも例がない。

お七が死んでから三年後、井原西鶴がこの事件を「好色五人女」に取り上げてから有名となり、浄瑠璃や歌舞伎の題材として取り上げられた。以下に全文を紹介する。

### 「八百屋お七」

その頃本郷二丁目に 名高き八百屋の久兵衛は 普請成就する間 親子三人もろともに 檀那（だんな）寺なる駒込の吉祥院に仮住まい 寺の小姓の吉三（きちざ）さん 学問なされし後ろから 膝でちょっくらついて目で知らせ 「これこれもうし吉三さま 学問やめて聞かしゃんせ もはや普請も成就して わたしゃ本郷へ行くわいな たとえ本郷と駒込と 道はいか程隔ても 言い交わしたる睦事（むつごと）を 死んでも忘れてくだんすな」

それより本郷へ立ち帰り 八百屋商売するうちに 可愛い吉三さんに会いたいと 娘心の頑是（がんぜ）なく 炬燵（こたつ）の燠（おき・赤くおこった炭火）を二つ三つ 小袖の小褌（こづま）にちょっと包み 隣知らずも箱梯子（はしご） 一桁（ひとけた）、二桁（ふたけた） 登り行き 三桁（みけた）、四桁（よけた）を登りつめ これが地獄の数え下駄（げた）

ちよいと曲げてる窓庇（まどひさし） 誰知るまいと思えども 天知る地知る道理にて 釜屋の武兵衛に訴人（そにん）され 是非なく地頭に呼び出され その日のお裁（さば）き極まれば

茸毛（あしげ）のドン畜生（白に茶や黒色の毛が混じった馬）に乗せられて 伝馬町から引き出され 髪を島田に油町（ゆいのちょう） 辛き憂目の塩町を 油屋お染じゃないけれど 久松町をとろとろと お七を見に出し見物は ここやかしこに橘町 富沢町をひき回し 姿やさしき人形町 娑婆（しゃば）と冥土の堺町 さても哀れや不憫やと てんでに涙を茸屋（ふきや）橋

とりわけ嘆くは父爺（おやじ）橋 江戸橋越えて四日市 日本橋へとひきいだし 是非もなか橋京橋を 過ぎれば最早程もなく 田町九町車町 七つ八つ山右に見て 品川表（おもて）を越えるなら ここがおさめの涙橋 鈴ヶ森（死刑場）にと着きにける あまた見物おしわけて 久兵衛夫婦は駆け来たり これこれお七これお七、これのうお七という声も 空に知られぬ曇り声

ワツと泣いたる一声が 無情の煙と立ちのぼれば ここが親子の名残なり 哀れやこの世の見納め 見おさめ

### 「八百屋お七（猥歌版）」



(前唄)

さては一座の皆様方よ ちょいと出ました私は お見かけどおりの悪声で いたって色気もないけれど 八百屋お七の物語 ざーっと語って聞かせましょう それでは一座の皆様方よ ちょいと手拍子願います

(本唄)

ここは駒込吉祥寺 寺の離れの奥書院 ご書見(しょけん)なされし その後で 膝をポンと打ち目で知らず うらみのこもった まなざしで 吉さんあれして ちょうだいな (ソレソレ)

八百屋お七のみせさきにゃ お七のすきな夏なすび 元から先まで毛の生えた とうもろこしを売る八百屋 もしも八百屋が焼けたなら いとし恋しの吉さんに また会うこともできようと 女の知恵の浅はかさ 一把(いちわ)のワラに火をつけて ポンと投げたが火事の元 (ソレソレ)

誰知るまいと思うたに 天知る地知るおのれ知る 二軒どなりのその奥の 裏の甚兵衛さんに見つけられ 訴人せられて召し捕られ 白洲(しらす)のお庭に引き出され 一段高いはお奉行さま 三間下がってお七殿 もみじのような手をつけて 申し上げますお奉行様 (ソレソレ)

私の生まれた年月は 七月七日のひのえうま それにちなんで名はお七 十四と言えば助かるに 十五と言ったばかりに 助かる命も助からず 百日百夜は牢ずまい 百日百夜があけたなら はだかのお馬に乗せられて なくなると通るは日本橋 (ソレソレ)

品川女郎衆のいうことによ あれが八百屋の色娘 女の私がほれるのに 吉さんほれたは無理は無い (ソレソレ)

浮世はなれた坊主でも 木魚(もくぎょ)の割れ目で思い出す 浮世はなれた尼さんも バナナむきむき思い出す まして凡夫のわれわれは思い出すのも無理は無い 八百屋お七の物語 これにてこれにて終わります

## 珍しい歌

---

### 「梅干の歌」

二月三月花盛り  
鶯鳴いた春の日の  
楽しい時も夢のうち  
五月六月実がなれば  
枝からふるい落とされて  
近所の町へ持ち出され  
何升何合量（はか）り売り  
もとより酸っぱいこのからだ  
塩につかってからくなり  
紫蘇（しそ）に染まって赤くなり  
七月八月暑い頃  
三日三晩の土用干し  
思えばつらいことばかり  
それも世のため人のため  
しわはよっても若い気で  
小さい君らの仲間入り  
運動会にもついていく  
ましていくさのその時に  
なくてはならないこのわたし

めったに見たことの無い歌を忘れないように控えておいたもの。梅干でも歌にできるのかと先人の遊び心に感心した。

「鶯鳴木寒去詩 うぐいすきにないて かんさるのし」  
虎龍一蟠知鬪将 こりゅうひとたびわだかまって とうしょうをしる  
矢張奔馬酔淮南 やをはりうまをはしらせ わいなんによふ  
親親良君蒙幾世 しんしんたるりょうくに いくよかこうむり  
雲趨風趨花生嵐 くもはしりかぜはしり はなはあらしにいく  
太宗三年卯月 たいそうさんねんうづき  
二十日之夜 はつかのよ  
王 曹操書 おうそうそうしょ

江戸時代に作られた和製漢詩。学生の頃、今は廃刊となった文藝春秋社「漫画読本」の編集後

記欄に掲載されていた。大学尺八部の有志で発行していた月刊誌「四畳半」で紹介したところ感動の嵐吹き荒れの販売数は三倍増となった。「なぜ？」と思われる方が殆どであろう。全く無理からぬことである。これが読めるほうが不思議と言える代物で、正解は以下のとうり。「おめこのかんざらしこたつでいちばんちとしょうかやっぱりほんまによいわいなおやおやいいきみもういくようんすうふうすうはないきあらしたいそうさねうづきはずかしいよおそそしょ」

## 誤解している歌

---

聞き覚えで歌っている歌詞などには間違いが多い。私は歌が好きだったが、習っていない歌も多く、適当に作詞して歌っていた。そのため、とんでもない誤解をしていたのだが、著名人でも私と同じように適当に作詞して歌っている例を発見しては私だけではないと喜んでいて。

君が代は千代に八千代に サザエ石の 庭お隣りで苔のむすまで

私が小学生の時、国歌は全く意味不明な歌であった。国家斉唱に反対する教師が多く、生徒たちは歌の意味を全く教えられなかった。「さざれ石」が成長して巖（いわお）となるという奇想天外な意味は高校まで判らなかった。そのため小学校でみんなが声を合わせて歌っていると前記のような歌詞におちつき、「日本は庭のつながったお隣同士がコケが生えるまで仲良くする国」であることを喜ぶ歌と思っていた。

幹に生えりぬ ゆかしことば

中学生の時、選ばれて混成合唱団の一員となった。「オペラ」というあだ名の音大出の女先生が指揮者だった。シューベルトの「菩提樹」が県大会での自由曲だった。先生の指導により「幹に、生（は）えりぬ」と歌っていたが「ことば」がはえるなんて変な歌詞だなと思っていた。十数年後、「幹には、彫（え）りぬ」が正しいとわかり漸く意味が通じた。予選落ちしたのはこの誤りが原因だったのだろうと思っている。

今こそわかれ目 いざさらば

父が北陸の小さな映画館に勤めていたため、私は映画館の中で育ったようなものである。そのため「金の切れ目が縁の切れ目」とか「どうせ半目とでたものを」等々、ろくでもない言葉は良く知っていた。だから、「揚げば尊し」の「わかれ目」とは「丁半、運の分かれ道」のようなものと理解していた。

箱根の山は天から剣 (山口瞳氏)

「箱根八里」から。「天下の険」が正解。「有名な険しい道」の意。

わらべは見たり 夜中のバラ (山口瞳氏)

「野中のバラ」が正解。「夜中」と誤解して納得していた山口少年が恐い。

春高樓の花の宴 眠る盃 影さして・・・

ああ荒城の弱の月 (向田邦子氏)

「荒城の月」から。「めぐる盃 影さして 夜半の月」が正解。「春、お城では花見の宴会が催された。なみなみと酒が注がれた盃が回され、その中に月の光が差し込んでいる。

ああ荒れ果てた城には真夜中に月ばかりが輝いている。」の意。

散るは涙か 旗露か (金田一春彦氏)

「大楠公」から。「はた(もしくは)露か」が正解。

後に国語学の権威となる氏の誤解は、さすがと思わせるものがある。

兎(うさぎ) 美味(おい) しかの山(唱歌「ふるさと」から)

食っちゃまったのかよ!

夕焼けこやけの赤とんぼ 追われてみたのはいつの日か(童謡「赤とんぼ」から)

怪獣か、ドラゴンフライは! (負われて、おんぶされて)

二つの亀はそれぞれに紐で結んでありました(童謡「月の砂漠」から)

朝日歌壇で見つけた歌

「砂漠行く駱駝(らくだ)に結ぶ金銀の亀の運命(さだめ)を泣きし幼な日」 上田由美子さん

いい爺さんに連れられていっちゃった(童謡「赤い靴」から)

異人さん(外国人)という言葉がなくなったからわからないのは無理も無いが。

春風そよ吹く空を見れば 夕月かかりて 匂い淡し(唱歌「朧月夜」から)

多くの人が意味を誤解している歌でもある。ここで「匂い」とは「春風」でも「菜の花」の香りでも無く、「月の光」のことだと言っても信じて貰えるだろうか。

## パロディ歌

---

「東山三十六峰 静かに眠る丑三つ時

突如おこる撃剣の響き

チャンリンヤ スナポコリン

切られて突かれて血がタラタラ」

(無声映画時代のチャンバラBGM)

向田邦子さんの「女の人さし指」の「チャンバラ」の一節に

「東山三十六峰 静かに眠る丑三つ時 チャンリンヤ スナポコリン どうしてそういうのか知らない どこで誰に聞いたのか判らないが、子供の頃、こんなことを口ずさみながら、古新聞を丸めたものを刀に見立ててチャンバラをした覚えがある」とあった。

このメロディーは長唄「勸進帳」のもので、軽快な名調子がチャンバラ映画に良く合い、三味線がかついだ歌謡漫才にも良く登場する。

おきろよおきろみなみなおきろ

おきないとたいしょさんにしかられる

(起きろよ起きろよ皆々起きろ 起きないと大将さんに叱られる)

しんぺいさんはかわいやな またきてなくのかよ

(新兵さんはかわいそうだな また来て泣くのかよ)

軍隊で起床ラッパと消灯ラッパにつけられた歌詞。徴兵制度がなくなった日本は幸せだ。

われは蚤の子 虱の子 (「われは海の子」から)

赤い靴 はいてたら ぬげた (童謡「赤い靴」から)

カラス何故鳴くの カラスの勝手でしょお (童謡「七つの子」から)

今はもう動かない おじいさんの心臓 (アメリカ民謡「おじいさんの時計」から)

窓をしめれば なんにも見えない (「別れのブルース」から)

## 大石内蔵助の歌

大石内蔵助良雄（おおいしくらのすけよしたか）は、播磨国（兵庫県）赤穂藩五万石の筆頭家老。元禄赤穂事件（一七〇一年）で主君の仇を討った忠臣として名を上げ、これを題材とした人形浄瑠璃や歌舞伎の『忠臣蔵』で有名になった。

### 「里げしき」

ふけて郭（くるわ）の よそほい見れば 宵の灯火うちそむき寝の  
夢の花さへ散らす嵐のさそひ来て 閨（ねや）をつれだすつれ人男  
余所（よそ）のさらばも尚（な）ほ哀れにて 裏も中戸をあくる東雲（しののめ）  
送る姿のひとへ帯 とけてほどけて寝乱れ髪  
黄揚（つげ）の小櫛もさすが 涙のはらはら袖に  
こぼれて袖に 露のよすがの うきつとめ  
こぼれて袖に つらきよすがの うきつとめ

内蔵助自作の唄。当時評判となり「うきつとめ」に因んで「うき様」「浮き大尽」と呼ばれた。映画や芝居で内蔵が目隠しをして芸者を追い回している際、「うきさま、こちら、手のなる方へ」と囃されているのを見た人もいるとおもう。この唄からは無骨な武士ではなく、粋な遊び人の風情がうかがえる。敵の目を欺くために遊んだのではなく、本来遊び好きな粋人だったのであろう。

この唄以外に「狐火」と題する唄があると聞き、探したがみつけれなかった。どなたか、ご存知ならばお教えてください。

### 「四条の橋」

四条の橋から灯が一つ見ゆる 灯が一つ見ゆる  
あれは二軒茶屋の灯か、丸山の灯か  
ウーイそうぢゃえ、ええそうぢゃいな

「四条の橋」は内蔵助が討ち入りのために江戸に赴く前に、これで見納めと作ったものと聞いている。

吉良上野介殿の弁護をしておきたい。三河の吉良町では九十間の堤を築くなど善政を施いた名君であった。宗匠頭巾をかぶり赤毛の駄馬にまたがって領内を巡回し、農家の庭先で茶を馳走になり農民と語りあっていた。そのため「赤馬の殿様」と慕われていた。

一方の浅野内匠頭といえば、母方の叔父、鳥羽城主内藤飛騨守忠勝は芝増上寺における四代將軍家綱の法要の席で宮津城主永井信濃守尚長を刺殺し翌日切腹、内藤家はお取潰しとなっている。一六八〇年、内匠頭は十四歳であった。

内匠頭は九歳にして浅野家の当主となっているから刃傷のもたらず結末は十分に承知していた

筈である。にも拘らず三十五歳の短命に終わったのは浅野家に流れる「短気の血」の成せるわざであったろう。

旗本伊勢貞丈が書いた『四十六士論評』（弟の浅野長広から聞き取ったとされている）でも「内匠頭は性格が甚だ急な人であり、吉良に賄賂を贈るべしと家臣にすすめられたときには、内匠頭は『武士たる者、追従をもって賄賂を贈り、人の陰を持って公用を勤めることはできない』と述べたという」とその剛直さを記している。しかし真相は歴史の闇の中に消えてしまった。

事件の発生当初、世間はケチな内匠頭が吉良殿に賄賂を贈らなかったことが原因だろうと落首にもしていた。それが約五十年後、歌舞伎で「仮名手本忠臣蔵」が大当たりをとると、架空の筋書きが真実の物語と思われてしまった。

「内匠頭が善人で吉良上野介が悪人」とすることが日本人の常識となってしまった今、全くの作り話だといっても信じる者は居ない。言えば、変人もしくは戦時中同様に非国民扱いされかねない。おそろしい話だ。



## 大津絵節

---

「大津絵節」は、江戸時代に流行し明治に入っても広く歌われた。元々は東海道の要所として知られた大津の遊里で遊女らが歌い出したものだという。元唄にある「げほう梯子ずり…」と始まる文句は、この土地の民画「大津絵」を歌い込んだもので、護符として売られた十種が中におり込まれている。「冬の夜」はその替え歌である。

(元唄)

外法（げほう）梯子（はしご）ずり  
雷、太鼓（たいこ）で釣をする  
お若衆は鷹をすえ  
塗笠（ぬりがさ）おやまは藤の花  
座頭（ざとう）の禪（ふんどし）、犬咬（ほ）えつけア  
仰天し、杖をば振上る  
荒氣の思も發氣して、鉦（かね）撞木（しゅもく）  
瓢箪（ひょうたん）鯰（なまず）で押へましょう  
奴（やっこ）の行列  
つり鐘辨慶（べんけい）  
矢の根五郎

「冬の夜に」

冬の夜に風が吹く  
知らせの半鐘（はんしょう）がジャンと鳴りや  
これさ女房わらじ出せ  
刺子襦袢（さしこじゅばん）に火事頭巾  
四十八組おいおいに  
お掛り衆の下知（げち）をうけ  
出て行きや女房そのあとで  
うがい手洗（ちょうず）にその身をきよめ  
今宵うちのひとに怪我（けが）のないよう  
南無妙法蓮華經 清正公（せいせいこう）菩薩  
ありやりゃんりゅうとの掛け声で勇みゆく  
ほんにおまえはまならぬ  
もしもこの子が男の子なら  
おまえの商売させやせぬぞえ  
罪じゃもの

火消しの女房が、火事場へ亭主を送り出し、その身を案じている唄。女房は身重である、はじめての子であろう。

古今亭志ん生師匠が時の皇太子殿下（後の平成天皇陛下）の教育係りをしていた小泉信三氏に招かれて一席伺ったあと、余興として歌ったところ、氏は感激のあまり落涙されたという。以来氏はしばしば師匠を招き、落語を聞いた後、この唄に必ず涙したとのこと。

小泉氏のご子息信吉氏と多くの慶応の学生を戦争という国家の大火で亡くされている。唄とはいえ、火消しの女房の不安と悲しみが他人事とは思えず、涙を禁じえなかったのだろう。

昭和四十一年に氏が亡くなった後、四十八年に作家の山口瞳氏が師匠を明神下の鰻屋「神田川」に招いてこの唄を聞く会を催している。出演料は十万円と記憶している。

志ん生師匠の唄も聞きたいが、唄一曲に十万円、平成二十年の今の価値なら四、五十万円という贅沢を一度くらいやって見たいものだ。

（注）清正公菩薩・・・当時、加藤清正を火消しの守り神としていた。

## 惜別の歌

北寿老仙（ほくじゅろうせん）をいたむ 蕪村

君あしたに去（さん）ぬ  
ゆうべの心千々（ちぢ）に 何ぞはるかなる  
君をおもって岡のべに行（ゆき）つ遊ぶ  
をかのべ何ぞ かくかなしき  
蒲公（たんぽぽ）の黄に薺（なずな）のしろう咲きたる 見る人ぞなき  
雉子（きぎす）のあるか ひたなきに鳴（なく）を聞（きか）ば  
友ありき 河をへだてて住（すみ）にき （注1）  
へげのけぶりの はと打（うち）ちれば （注2）  
西吹風（にしふくかぜ）のはげしくて  
小竹原（おささはら） 眞すげはら  
のがるべき かたぞなき  
友ありき 河をへだてて住にき  
けふは ほろろともなかぬ  
君あしたに去ぬ  
ゆうべの心千々に 何ぞはるかなる  
我庵（いお）のあみだ佛  
ともし火もものせず 花もまいらせず  
すごすごとゝ（たたず）める今宵（こよい）は  
ことに たうとき （注3）

蕪村三十歳の作。千葉の酒造りで俳人でもある早見晋我が七十五歳で亡くなった折、仏前に捧げた詩。江戸時代の作品とは思えぬ程近代的な詩である。

この詩は作られてから五十年後、蕪村の死の十年後に晋我の息子が亡父の追悼記念俳句集に載せ、ようやく日の目を見た。なぜかくも長く埋もれていたのか、或いは埋もれさせたのか謎であり、興味深い点である。蕪村自身が早見晋我のためだけの弔文としたかったのか、あるいは晋我の息子が、当時としては異形な詩を世に出すことを憚ったのか。いずれにせよ、当時の常識では受け入れられなかったであろう破格の歌である。現代に生きていたなら蕪村はわれわれに俳句以外にもっと多くの詩を残してくれた筈である。

注1・キジがひたすらに鳴くのを聞くと、かけがえのない友が、川をへだてて住んでいたことが思い出される。

注2・「へげ」…「かまど」の古語

注3・山本健吉氏の訳によると

「私の茅屋（ぼうおく）の阿弥陀仏に、お燈明もさしあげず、お花も供えず、ひとりぼつねんと

たたずんでいる今宵は、ありし日のあなたの姿がことに尊く思い浮かべられるのです。」

となっている。（「河出書房新書・日本の古典」より）

しかし私は、尊く見えるのは「阿弥陀仏」であって、山本氏の誤訳と思う。

以下私の訳。

「わが庵の阿弥陀仏は、御燈明もお花もさしあげない今宵、もの寂しく、たたずんでおられますが、その様がかえって、ことのほか尊く思われます。」

微雨空濛タリ芒種ノ節                      びうくうもうたり    ぼうしゅのせつ  
故人我ヲ捨テテ何処ニカ行ケル    こじんわれをすてて    いづこにかいける  
寂寥ニ堪エズ則チ尋ネ去レバ        じゃくりょうにたえず    すなわちたずねされば  
万朶ノ青山杜鵑鳴ク                      ばんだのせいざん    とけんなく

一休宗純和尚作。「とんちの一休さん」は虚像であり、実像は若い頃、何度も自殺を図り、その後も酒と女に溺れる破戒僧であった。

「善界易入 魔界難入（ぜんかいりやすく まかいりがたし）」も和尚の書にあった。激しい生き様の僧であった。

（注）空濛 霧雨が降って薄暗いさま  
芒種 麦を刈り稲を植える時期  
杜鵑 ほととぎすの漢名

別れとは悲しきものと言いながら  
旅に出ていつ死ぬらんと問うなかれ  
よしやよし幾千年をへだつとも  
花白く水の流るるその間  
見よ、見よ、吾は死するあたわず

島崎藤村

昭和四十一年早春、京都洛北梅ノ木荘の大学受験浪人二十数名が思い思いの受験校へと出発していた時に愛唱した。

浪人寮での生活には合格出来るのか不安もあったが、皆仲良くなり、春はタバコの吸い方教室、夏の夜は賀茂川アベックの花火おどし、秋なれば近くの洛北高校にもぐり込んで京女とのフォークダンス、大晦日には知恩院の除夜の鐘突き見学など、楽しさもあふれていた。

ある時にはヤクザ屋さんの御令息が喫茶店のウエートレス嬢を連れ込み、話し声が聞こえている時は勉強の邪魔にはならなかったが、ハタと声が聞こえなくなり全身これ耳と化すのであった。それやこれやで半数が二浪とあいなった。

## 防人（さきもり）の歌

---

荒御魂（あらみたま） 国守るらめ 和魂（にぎたま）は父母のもとに帰りきまさね

古代の人々は、人の心は荒々しい荒御魂（あらみたま）、柔和な和御魂（にぎみたま）および不可思議な霊力を持つ奇御魂（くしみたま）の三つで成り立っていると考えていた。

慶応義塾塾長故小泉信三氏（平成天皇と美智子皇后の橋渡しとして知られる。）のご子息、海軍主計中尉信吉が戦死された折、叔父君が詠まれた歌。この歌を受け取った際、母君と二人の妹君はこらえきれず慟哭された。

短剣を吊りてきませよ 海のごと深き夜空に迎え火焚（た）くに

心に深く沁み込んで忘れることの出来ない名歌である。新聞の短歌欄で見つけたが作者の名前を控えていなかった。どなたか教えてください。

海ゆかば水漬（みづ）く屍（かばね） 山ゆかば草むす屍

大君の辺にこそ死なめ かえりみはせじ

戦没者の慰霊祭には信時潔作曲の「海ゆかば」がよく歌われるが、この歌は「魔曲」と呼ばれていた。この歌が歌われると遺族は全てが運命であったと諦めがつき、「戦争反対」等の批判をしなくなってしまうからだという。

「海ゆかば」はわたしが愛する歌の一つであるが、そう広言するには、「私は国粹主義者ではない」とか、「軍国主義者にあらず」とか、いちいち言い訳をしなければならない面倒さを持つ歌なのである。

この歌についての記事は、初めて切り抜いてから二十数年の間に3回を数える。それをご紹介します。まず、この歌がどのように誕生したかが紹介された記事を抜粋する。

『平成20年6月8日 朝日新聞 「うたをよむ」から

家持と信時の「海ゆかば」 新保 祐司（文芸評論家・都留文科大教授）

『万葉集』巻十八に「陸奥国より金（くがね）出せる詔書を賀（ことほ）ぐ歌」と題された大伴家持の長歌がある。この歌の中に「海行かば 水漬く屍 山行かば 草生す屍 大君の辺にこそ死なめ 顧みはせじ」の一節がある。

この長歌は、東大寺の大仏建立に情熱を注いでいた聖武天皇が、黄金の出土を喜んで発した詔書の中で、大伴・佐伯両氏の「海行かば 水漬く屍 山行かば 草生す屍 大君の辺にこそ死なめ 穩（のど）には死なじ」という祖先伝来の忠臣としての覚悟をほめたことに感激した家持が作ったものである。（省略）この一節に、昭和十二年、当時東京音楽学校（現・東京芸術大学音楽学部）の教師であった信時潔（のぶとききよし）が作曲したのが、昭和の悲劇を象徴する名曲「海ゆかば」である。』

戦後生まれのわたしがこの曲を聞いたのは、専ら戦争映画の中であった。「戦艦大和の最後

」「姿無き一〇八部隊」「人間魚雷回天」「ハワイの夜」等々、昭和二、三十年代には、太平洋戦争を扱った数多くの映画があった。その中で、必ずといっていいほど、この歌が流れてくる。戦時下のあらゆる場面でも歌われていた。以下その例を記載している記事を紹介する。

『平成17年9月16日 朝日新聞 「ひととき」から  
母しのぶ「海ゆかば」 松山市 加藤千鶴子 主婦・52歳

戦時中歌われた「海ゆかば」。今年五月、85歳で急逝した母につながる忘れられない歌だ。  
(省略)

その母がよく、口ずさんでいたのが「海ゆかば」。メロディーは、私たちきょうだいにとってなじみ深いものになっていた。だが、その後、歌詞の内容を知った私は母に「こんな意味の歌なんだよ」と怒りまじりに説明した。(省略)

それからの母は「海ゆかば」が口をついて出ても、すぐ歌うのをやめるようになり、いつしか全く歌わなくなった。戦死した兄たちへの、母なりのけじめだったのかもしれない。

私は母から大好きな歌を奪ったことを心のどこかで悔やみ続けていた。そして今、思う。この歌は、沖縄の片隅で黙々と戦後復興の末端を担って生きた母への挽歌なのだ、と。』

この歌を愛する人々の思いは複雑である。戦後数十年を経た今でも、この曲を歌うと天皇崇拝者、右翼、軍国主義者などの誤解を受けるので歌うことに抵抗がある。不幸な運命を持たされた歌である。

『平成17年 朝日新聞 「時の墓碑銘」から  
小池民男(朝日新聞社コラムニスト)

(省略) 太平洋戦争の後半、日本軍が敗退し、玉砕を重ねたとき、それを報じるラジオが流しつづけた。勇壮にも響くが、悲哀の度を増していった。散っていく者たちへの哀悼とともに、意識の深みでは、沈みゆく大日本帝国を葬送する歌としても受けとめられたのではないか。(省略) 作家の阪田寛夫さんは若いころ初めて聴いたときの曲の印象を「私の耳には賛美歌のようにひびいた」と書く。(「海道東征」)。

多くの人の記憶に焼きついているのは、43年、東京の神宮外苑競技場で催された出陣学徒壮行会の光景ではないだろうか。雨中、泥だらけで行進する学生たちを見送る大観衆が「海ゆかば」を歌った。地響きのような歌声だった。』

この曲は、作者信時潔が意図したか否かはわからないが、誕生のときから「鎮魂」の役割を持っていたように思う。歌詞は確かに天皇を崇拝するもので、勇壮な趣があり、それゆえ戦時下にあって国を挙げて歌うことが奨励されたのであるが、メロディーとしては防人の死を悼む挽歌である。前述の阪田寛夫さんが賛美歌と感じたり、沖縄のお母さんは直感でそのことを感じて魂鎮めのために口づさみ、息子をなくした悲しみを癒していたのだろう。

私はこの名曲を、戦没兵士のみならず戦火で亡くなった人々の鎮魂歌として歌い継がれることを

願う。

## あすなろの歌

---

ひのきよくにた あすなろは  
くる日もくる日も 思い続ける  
あすなろ あすなろ あすなろう  
あすなろ あすなろ あすなろう  
あすなろう

東宝映画「あすなろ物語」より

昭和三十五年頃作成された映画の中で、根岸明美嬢扮するみつ編みの女学生がシューベルトの「菩提樹」のメロデーにのせて歌っていた。福井の田舎の中学生であった私は野生的な根岸嬢の歌声と、初めて聞く都会的な「菩提樹」のメロディーに魅せられた。

小説「あすなろ物語（井上靖）」は高校二年の夏に読み、その印象を夏休みの宿題の感想文として提出したところ学校新聞に掲載された。自分の文章が初めて活字になったのでうれしかった。

小説の筋は、今は木材として値打ちのないあすなろ（翌檜・常緑の高木）だが明日は高価な檜になろうとして努力する若者達の生き様を描いたもので、高校生の私は青春のエネルギーあふれる小説だと読み、その旨を感想文に書いた。

しかし還暦を過ぎた今読み返すと、この小説は、ついに檜になれなかったあすなろの悲しみも描かれていることがわかるようになった。わたしもあすなろで終わるからだ。

さびしさや 華のあたりの あすならふ

芭蕉

「あすなろのうた」

あすなろ あすなろ あすはなろう  
おやまの だれにも まけぬほど  
ふもとの むらでも みえるほど  
おおきな ひのきに あすはなろう

あすなろ あすなろ あすはなろう  
あめにも かぜにも まけないで  
ぐんと そらまで とどくほど  
おおきな ひのきに あすはなろう

あすなろ あすなろ あすはなろう  
とうげを こえる ひとたちの  
ひるは ひかげに なるような



おおきな ひのきに あすはなろう

童謡の中でも「あすなろ」は歌われている。作詞は「子鹿のバンビ」を作詞した坂口淳さん。子供たちには、いかなる境遇に生まれ育とうとも檜をめざしてほしいものだ。

## 第九によせて

---

「歓喜に寄せて」

おお友よ、このような音ではない！  
我々はもっと心地よい  
もっと歓喜に満ち溢れる歌を歌おうではないか  
歓喜よ、神々の麗しき靈感よ  
天上の樂園の乙女よ  
我々は火のように酔いしれて  
崇高な汝（歓喜）の聖所に入る  
汝が魔力は再び結び合わせる  
時流が強く切り離したものを  
すべての人々は兄弟となる  
汝の柔らかな翼が留まる所で  
ひとりの友の友となるという  
大きな成功を勝ち取った者  
心優しき妻を得た者は  
彼の歓声に声を合わせよ  
そうだ、地上にただ一人だけでも  
心を分かち合う魂があると言える者も歓呼せよ  
そしてそれがどうしてもできなかった者は  
この輪から泣く泣く立ち去るがよい  
すべての被造物は  
創造主の乳房から歓喜を飲み、  
すべての善人とすべての悪人は  
創造主の薔薇の踏み跡をたどる。  
口づけと葡萄酒と死の試練を受けた友を  
創造主は我々に与えた  
快樂は虫けらのような弱い人間にも与えられ  
智天使ケルビムは神の御前に立つ  
神の計画により  
太陽が喜ばしく天空を駆け巡るように  
兄弟たちよ、自らの道を進め  
英雄のように喜ばしく勝利を目指せ  
抱き合おう、諸人（もろびと）よ！  
この口づけを全世界に！  
兄弟よ、この星空の上に

父なる神が住んでおられるに違いない

諸人よ、ひざまついたか

世界よ、創造主を予感するか

星空の彼方に神を求めよ

星々の上に、神は必ず住みたもう

平成二十年十二月、私たち家族は佐渡裕氏が指揮する「第九」を聴くために大阪市福島にあるザ・シンフォニーホールを訪れた。家族そろってクラシックを聞くのは、初めてのことであった。演奏に関しては、バイオリンの数がすくなく独唱者も声量不足で、佐渡氏のバイタリティーをもってしても重厚さが足りないように思えた。しかし、私はかねがねベートーベンの「第九」を生演奏で聞いてみたいと願っていたので、充分満足であった。家族そろって健康で音楽を聞くことができ、幸せな年の暮れであった。

「第九」とは私が一度はドイツ語で歌ってみたいと思う曲であるが、それ以上に以下のような逸話があるため、日本人にとって様々な感慨をもたらしている曲でもある。

『平成元年12月16日 日本経済新聞 「春秋」から』（省略）

一九四四年（昭和十九年）八月六日の午後、帝大（東大）法文経二十五番教室での「出陣学徒のための演奏会」に「第九」の三、四楽章が鳴り響いた。敗色濃厚だったが、「せめて至高の名曲を聴いて」という学生の願いから催された会だった。（省略）

「いすを積み上げた仮設舞台でした。ただならぬ悲壮感が漂っていました」（阿南春子さん）、  
「すべての人類は汝のやさしき翼の下、友達たれ」と日本語の合唱でした。みな泣いて歌いました」（井上初子さん）。

二人とも東京高等音楽学院（国立音楽大学）の生徒でアルトのパートに参加していた。尾高氏の指揮棒が静止したとき、長い沈黙が続いたという。（省略）』

この話は国立音楽大学のホームページにも以下のように紹介されている。

『国立音楽大学の歴史から』

一九四四年、夏。前年から理系以外の学生に対する徴兵猶予は停止され、多くの若者が戦地に送られていた。東京帝国大学（現東大）法学部では、また新たに学生を送り出すにあたり、日本交響楽団（現NHK交響楽団）を招いての壮行会を開くことを計画した。演奏曲目は、「第九」。  
（省略）

ほぼ全員が参加した音楽学院の合唱団は、押しつぶされそうな混み様の中で、精一杯に声を張り上げた。（省略）演奏終了後、普通ならば拍手が起こるはずの会場内は、しばらくの間静まり返っていたという。その沈黙こそが、彼らの全ての思いを表していたのかもしれない。』

息子や娘には私がなぜ第九を好きなのか教えたことは無い。言葉では何故か言いにくい。伝え

たいことは、平和な時代に生きている君たちの祖父の時代に、戦場に赴く前に「第九」を聴きたいと願った学生がおり、泣きながら合唱した人々がいたことを忘れないで欲しい、そして再びそのような時代が来ないよう戦ってほしいということだった。

## こころざしの歌

---

屑（くず）煙草 集め喫（す）へれど 志す

高き彼物（かのもの） 忘らふべしや

吉野秀雄

松下幸之助氏が成功の秘訣を聞かれて「志があったからだ」と答えていた。

彼の高名なクラーク博士の「ボーイズ、ビー、アンビシャス」は「少年よ、大志を抱け」と訳されているが、これは名誤訳だという説がある。「アンビシャス」とは「名声、権力および富などについて野心的な」という意味であって、博士は「若者よ、野心家たれ」と単純に米国流の開拓者魂を抱けと言ったつもりだろう。しかし「大志」と訳されたため日本では名言として残った。まあ、そのお陰で「大志」を抱いた青年が育ったのだから誤訳も時には役に立つものだ。あるいは、誤訳を承知の上で改訳したのならば、明治の先人達の知恵は計り知れないということにもなるが。

### 豪傑節

俺が死んだら三途の河原でよ

鬼を集めて相撲とるよ

万里の長城でしょんべんすればよ

ゴビの砂漠に虹がたつよ

ギャング絶えたるシカゴの街でよ

孫が詣でる忠霊塔よ

三番の歌詞は、「アメリカを征服した後、当時世界に名の知れたシカゴのギャングをことごとく退治し、日本軍人の霊を祀る慰霊碑を孫が参拝する日がくるだろう。」という意味。世界制覇の野望に満ちた時代の歌でちと穏やかではないが、今の若者に爪の垢でも煎じて飲ましてやりたいくらい気宇壮大なものがある。歌詞は豪快だが曲は哀愁に満ち、子孫に伝えたいと願う一曲である。

士也母 空應有 をのこやも むなしかるべき

萬代尔 語續可 よろずよに かたりつぐべき

名者 不立之而 なは たてずして

山上憶良

身を立てず 名も挙げずして 焚き火する

新聞で見たが、作者名を忘れた。小生の気持ちを代弁している句。

志を果たして いつの日にか帰らん

山は青き故郷 水は清き故郷

高野辰之

ブラジルの日本人移民の集いではこの歌を禁止したそうだ。どんなにめでたい集まりでも、この歌をうたいたすと、みな泣き出してしまうからだそうだ。

平成二十三年三月十一日、東北大震災が発生した。被災地を励ます催しにこの歌が登場した。聞いているだけで涙が出る。山青く水清き東北の復興を切に願う。

短剣を吊りて来ませよ海のごと深き夜空に迎え火を焚（た）く 小松原雪

この歌を知ったのは私がまだ二十代であったから、以後半世紀が過ぎた。その間にこの歌に寄せる想いを新聞紙上で二、三度読んでいる。この歌を読んで私と同じように感動した人は、表面に現れない人々を含めると数十人、もしくは数百人はいるのではないかと思う。以下、私が読んだ感想文を紹介する。

「酩酊放談 八月十五日によせて（上一朝しゃんかずとも）」から

「短剣を吊りて来ませよ海のごと深き夜空に迎え火焚くに

好きな短歌だ。15～6年前に新聞のコラムで知った。著者は当時大坂証券取引所理事長をしていたY（ワイ）氏である。氏も昭和30年頃の地方紙でこの歌を見つけたそう。慟哭を抑えた静けさ、それによってかえって際立つ感情量の豊かさに痛く心を打たれた。と書き、作者は若い未亡人かあるいは母なのか、と書いている。（以下略）」

「ネイビーブルーに恋をして（柏木史郎氏）」から

「短剣を吊りて来ませよ海のごと深き夜空に迎え火焚くに

平成の世になってから詠われた詠み人知らずの一首だそうです。毎年心をこめて焚く迎え火のひとは、彼女の兄か弟か、婚約者であったのか、あるいは夫でしょうか。そのひとは、南洋か、沖縄の、夜空の色と同じ紺碧の海に散ったのでしょうか。戦後数十年が経ち、かつての乙女が今や銀髪の老婆となっても、彼女の脛にその日現れるその海軍士官は、いつも若々しい頬に微笑みを湛えているのでしょうか。そして、純白の第二種軍装の男の腰には、かつて憧憬の的だった海軍短刀が凜凜しくも佩されて、そのうつくしくもせつない記憶が老いた彼女の瞳をまた濡らすのかもしれない。」

ここで「迎え火を焚く」と「迎え火焚くに」があることにお気づきだろう。私が読んだときは「迎え火焚くに」だった。しかし近藤芳美氏が朝日歌壇への投稿歌から選んで編纂した「無名者の歌」（一九七四年新塔社刊行）では「迎え火を焚く」となっている。

想像するに、選者である近藤氏が作者の小松原氏に対して指導もしくは示唆した結果、修正がほどこされたのであろう。

たしかに「迎え火焚くに」よりは「迎え火を焚く」としたほうが、客観性が増し、より力強い名歌となっていると思う。しかし、その結果、この歌の作者が男性か女性か、わからなくなっている。私は元の「迎え火焚くに」のほうが、少々すねているような女性的な甘えが感じられ、好きである。

## クシコス・ポスト（クシコスの郵便馬車）

---

野道越え遠く 山、川、村、過ぎて  
嵐吹く日にも 走るよ、走るよ、郵便馬車  
走れ、走れ、ラッパを高く吹き鳴らして  
走れ、走れ、駒（こま）の蹄（ひづめ）高く走れ

夜道越え寂し 人無い郷（さと）過ぎて  
遠い灯を目指し 走るよ、走るよ、郵便馬車  
走れ、走れ、ラッパを高く吹き鳴らして  
走れ、走れ、駒の蹄軽く走れ

私が小学生のときの教科書では「クシコスの郵便馬車」と題していた。しかし「クシコス」というのは、ハンガリー語（マジャル語）の**Csikos**（チコーシュ：『馬』の意味）を日本語読みしたもので、「ポスト」は「郵便」だから「クシコス・ポスト」とは「郵便馬車」と訳すのが正しいそうだ。したがって今では「クシコス・ポスト」と呼ばれている。

ハンガリー語は「マジャル」語と呼ぶのだが、「モジョル」民族というのがハンガリー人の事だとのこと。

作曲家**Hermann. Necke**（ヘルマン・ネッケ：1850-1912）はドイツの作曲家で、ピアノの小品などを書いていたとのこと。

上記の「クシコス・ポスト」の歌詞はうる覚えで、あやしい。「駒」は「馬」かもしれない。「高く走れ」、「軽く走れ」も正確か、順序が正しいかの自信もない。正確に覚えている方がいらっしゃったらご教授ください。

ちなみに、「ハンガリー語、フィンランド語、エストニア語、トルコ語」は、日本語の遠い親戚の言語にあたるので、かなり、日本語の文法に近いらしい。このグループは「ウラル・アルタイ語族」といって、大陸の中央にあった言葉が、東へ移動したのが「日本語」で、西へ移動したのが、ハンガリー語などなので、元をたどると、同じような言葉になるそうだ。

そういわれてみると、哀愁を帯びた「クシコス・ポスト」のメロディは、灯台守の夫婦を歌った「喜びも悲しみも幾年月」に似ている。「クシコス・ポスト」が日本の運動会だけに使用されているのは、遠い昔親類であったかすかな記憶のせいかもしれない。